

「介護技術講習会受講者の意識の変化について」

稲田 弘子 貫 優美子 福崎 径子

A Study on Care Awareness for Participants of Care Technique Workshop

Hiroko Inada Yumiko Nuki Michiko Fukuzaki

Abstract

The present study investigated the effects of a workshop on care techniques that has been held since 2005 at our university. We conducted a care awareness survey by administering questionnaires to 39 participants before and after the workshop.

Even though the workshop was only 32 h in duration, we found that it implemented following three effects in addition to the acquisition of care techniques: (1) enabling participants to reflect on and evaluate their usual care, (2) enabling understanding of the importance of fundamentals and their practice in actual settings, and (3) promoting awareness of care expertise.

The chronic shortage of care personnel is a major social problem. The vast majority of care personnel are certified care workers with work experience who have aspirations to become certified care workers. While the present workshop may only have been one step on the way to becoming certified care workers for the participants, they considered it a meaningful experience.

Key words : Care technique workshop, self-evaluation, fundamentals of care, feasibility—, expertise

キーワード : 介護技術講習会 自己評価 介護の基本 実践可能 専門性

2010.11.17 受理

1. はじめに

介護福祉士の国家資格の取得方法は、取得に必要な養成課程を修了すれば卒業と同時に国家資格が取得できる養成施設ルートと、養成課程の教育を受けなくても3年間の実務経験があれば受験資格が取得できる実務経験ルートに大別される。実務経験ルートでは、筆記試験と実技試験があり、両方とも合格しないと取得できない。

現在の介護福祉士資格取得者の状況は、平成21年9月現在の総数は約81.1万人であるが、養成施設ルートが約25.5万人（約31.5%）、実務経験ルートが約55.6万人（約68.5%）となっており、実務経験ルートによる取得が多い状況である。

近年、国家試験受験者の急増により、試験要員等の確

保が困難であることや、会場やモデル、試験時間に制約があるため、入浴や排泄・食事の介助に関する試験が実施できない等の、実技試験の実施体制の整備や受験者の質の向上が課題として挙げられ、これらの改善を目的として平成16年10月に介護技術講習会の導入が図られ、平成17年度より、介護技術講習会が実施された。介護技術講習会は、全国で毎年5万人程度が受講している。

本学でも17年度から、介護技術講習会を毎年実施している。

本研究は、本学で実施している介護技術講習会の受講生が、4日間の講義・演習を受講することによって、介護に対する意識がどのように変化するかを調査し、本学で実施している介護技術講習会における影響と効果について報告する。

2. 介護技術講習会の概要について

1) 趣旨：厚生労働省社会・援護局長からの「社会福祉士及び介護福祉士法施行規則の一部改正について」通知（社援発第1019004号）によると、介護技術講習会導入の趣旨は、「介護福祉士試験の受験者の質の向上及び介護福祉士実技試験の適正実施に資することとするものである」と明記されている。

平成17年度から実施となった介護技術講習会では、32時間の講義・演習を受講し、総合評価に合格し修了証を受けることで、国家試験における実技試験が、受講した当該年度から3年間免除される。

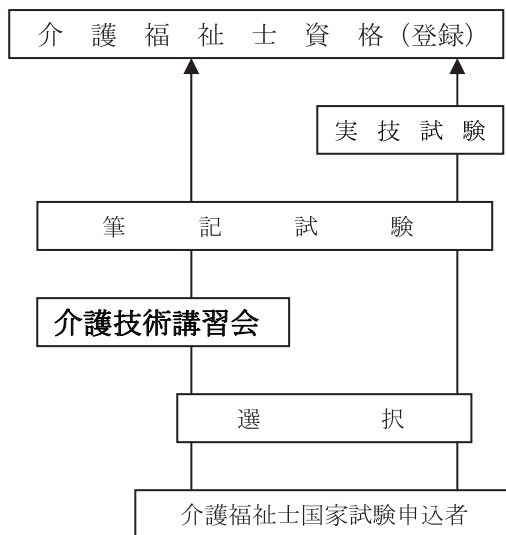


図1. 介護技術講習会の位置づけ
(出展：日本介護協ホームページ)

- 2) 実施主体：介護福祉士養成施設として指定を受けた学校および養成施設である。
- 3) 内容：介護技術講習会の内容と時間数は表1に示すとおりである。受講生は最大で40名と規定されており、それぞれの演習に関しては、主任指導者1名と、受講生8人に対して1人の指導者がついて指導に当たらなければならない。
- 4) 評価：介護技術講習会の課程修了の認定の判断根拠の一つとして総合評価があり、介護技術講習会を通じて受講生が介護等に関する専門的技術を修得しているかについて適正に評価するために実施する。課題は、表1の(3)～(7)の各項目の事例Aまたは事例Bの中(合計10事例)から1事例を選定する。制限時間は5分内とし、各事例で適正な評価項目を設定し、採点する。

表1. 介護技術講習会の内容および時間数

項目	内容	時間数(h)
(1)介護過程の展開	①介護における目標等の講義	講義2.5
	②事例に基づく介護過程に関する講義および演習	
(2)コミュニケーション技術	コミュニケーションの技法に関する講義および演習	講義1 演習1.5
	①社会生活維持拡大への技法に関する講義および演習	講義1
(3)移動の介護等	②安楽と安寧の技法に関する講義および演習	演習3
	排泄の介護に関する講義および演習	講義1 演習3
(4)排泄の介護	衣類の着脱の介護に関する講義および演習	講義1 演習3
(5)衣類の着脱の介護	食事の介護に関する講義および演習	講義1 演習3
(6)食事の介護	①入浴の介護に関する講義および演習	講義1
(7)入浴の介護等	②身体の清潔の介護に関する講義および演習	演習3
	(8)総合評価	(1)から(7)までの講義内容の修得に係る評価
合計		32

3. 介護技術講習会実施の工夫

介護技術講習会を実施するに当たり、主任指導者と指導者は14時間の「指導者講習会」を受講しなければならない。また、「介護技術講習指導マニュアル」を参考として、さまざまな工夫を行い、充実した介護技術講習会を実施するよう「介護技術講習指導マニュアル」に記載されている。

本学での工夫は、次の9点である。

- 主任指導者ならびに各指導者は、指導内容の整合性と統一性を保つために、事前打ち合わせを実施する。実施の際には、それぞれの演習課題に関して、1つ1つの声かけや動きの根拠を解釈し、それぞれの根拠に関して、指導者同士が共通認識を持つようにする。
- 介護技術講習会は「介護の基本を学ぶことである」ということを強調する。
- デモンストレーションの実施は、1つ1つの動きの根拠を受講生に説明しながら実施する。
- 「コミュニケーション」のデモンストレーションは実施せず、「受講生だったらどのような声かけをするのか」等受講生の考えを引き出すようにする。その際、指導者は受講生の考えを肯定的に受け止め、その声かけの根拠となるものを導き出すようにする。
- 「着脱の介助」の事例では、受講生に表2の用紙を使用し、記入させた。演習における「動き」の前に、なぜその声かけ・行動が必要なのか、根拠や留意点は何なのかなど、頭で「考える」ことを意識化する

ようにする。

- ⑥ グループワークでの演習では、受講生一人ひとりに対して、介護の手順（方法論）ではなく、根拠を説明し、受講生一人ひとりの能力に応じた指導をする。
- ⑦ 講義では、「知識の必要性」や「介護の専門性」について強調する。
- ⑧ 全国共通の講習が受講できるように「介護技術講習指導マニュアル」に準じて講義・演習しなければならないが、受講生が使用する「介護技術講習テキスト」は、一部修正されている部分があるが、平成16年に作成されたものなので、内容的に少し古い部分があるため、「介護技術講習テキスト」に準じながら最新の情報を提供するようにする。
- ⑨ 「介護」だけでなく、福祉全般について幅広く理解できるように、昼休み時間を利用し、希望者のみ「母ちゃんになりたい」「寝たきり老人のいない国」などのビデオを視聴する。

表2. 「着脱」の講義で使用するシート

声かけならびに行動	その根拠および留意点

実際はA4版

4. 研究方法

- (1) 調査対象者：平成22年度、本学の介護技術講習会受講者である。1日目は40名の受講者であったが、1名が体調不良にて2日目以降欠席したため、研究調査の対象者は39名である。
- (2) 調査方法：質問紙によるアンケート調査を実施した。アンケートは、1日目のオリエンテーション終了後と4日目の総合評価終了後に実施した。
アンケート内容の枠組みについては、次のとおりとした。

1) 基本属性

性別、年齢、介護職員としての勤務年数、資格、研修等の参加状況とした。

2) 普段行っている介護について

「利用者に適した介護だと思う」「なぜそのような介護をしているのか理解していると思う」「利用者に声かけをしていると思う」「介護に必要な知識を持っていると思う」「利用者の立場に立って考えて

介護していると思う」「利用者の自己決定を考えて介護していると思う」「利用者のことを理解して介護していると思う」について、「非常にそう思う」から「全く思わない」の5段階で記載させた。

3) 「介護」のイメージについて

「きたない」「きつい」「給料がやすい」「楽しい」「大変である」「やりがいがある」「勉強になる」「専門性がある」について、「非常にそう思う」から「全く思わない」の5段階で記載させた。

4) 介護観について

介護観については自由記述とした。

また、4日目の総合評価後のアンケートでは、「1,2日目の介護技術講習会后、現場に戻り実際取り組んでみたこと」、「介護技術講習会に参加して一番変わったこと」、「講義・演習の理解状況」などについて、自由に記述してもらった。

(3) 調査期間

1回目：6月26日（介護技術講習会1日目のオリエンテーション後）

2回目：7月11日（介護技術講習会4日目の総合評価後）

(4) 倫理的配慮

介護技術講習会の受講生には研究目的、研究方法を提示し、プライバシー保護に努めること、また、アンケート回答者が特定されることはないことを明記し、研究協力を依頼した。研究参加への同意の確認は、回答されたアンケート用紙の回収をもって同意とみなした。

(5) 分析方法

「普段行っている介護」についてと「介護のイメージ」について、各項目、「非常にそう思う」を4点、「どちらかと言うとそう思う」を3点、「普通」を2点、「どちらかと言うとそう思わない」を1点、「全く思わない」を0点とし、5段階で評価し、点数化した。受講生の意識が介護技術講習会受講前と受講後で有意に差があるかは、Wilcoxon t-test検定を用いた。なお、受講生にアンケートを依頼する際に、個人が特定されないよう、受講生自身がアンケート用紙に記号や番号、言葉などを自由に記載してもらい、アンケート回収後、1回目と2回目の回答者が対応できるようにした。

5. 調査の結果

介護技術講習会受講生40名のうち、2日目より体調不良にて受講を中止した1名を除き、分析対象となる有効回答数は、39名であった。

(1) 受講生の概要 (表3)

性別は、男性5名、女性34名、年齢は41.1±9.1歳(平均±SD)であった。介護経験年数は5.45±3.4年(平均±SD)であった。資格については、ヘルパー2級が31名と最も多く、資格なしが5名、ヘルパー1級が1名、社会福祉士が2名、その他として、社会福祉主事、准看護師、ガイドヘルパー、介護支援専門員などがあつた(複数回答)。

過去1年間の研修の参加状況については、施設内研修を受けている人は13名、受けていない人は26名、施設外研修を受けている人は9名、受けていない人は30名であった。また、施設内・外とも研修を受けていない人は24名であった。研修回数は、施設内研修が2.44回、施設外研修が0.54回であった。

表3. 受講生の概要

性別	男	5名
	女	34名
年齢	平均	41.1歳
	20~29歳	4名
	30~39歳	14名
	40~49歳	13名
	50~59歳	8名
介護経験年数	平均	5.45年
	1~3年	15名
	4~6年	12名
	7~9年	4名
	10年以上	8名
資格等 (複数回答)	なし	5名
	ヘルパー1級	1名
	ヘルパー2級	31名
	ヘルパー3級	0名
	社会福祉士	2名
	社会福祉主事	1名
	准看護師	1名
	介護支援専門員	1名
	研修	施設内 参加あり
参加なし		26名
施設外 参加あり		9名
参加なし		30名
施設内・外 参加なし		24名

n=39

(2) 普段行っている介護について (表4)

「非常にそう思う」を4点から「全く思わない」を0点とし、点数化し受講前と受講後の間で比較を行った。

受講前では、「利用者に対して声かけをしていると思う」が2.95点(4点満点)と最も多く、「なぜそのような介護をしているのか理解していると思う」が2.39点、「利用者のことを理解して介護していると思

う」が2.34点の順となっている。

受講前と受講後では、「介護に必要な知識は持っていると思う」(p<0.01)、「自分の行っている介護は、利用者に適した介護だと思う」(p<0.01)、「利用者に対して声かけをしていると思う」(p<0.05)、「利用者の立場に立って考えて介護していると思う」(p<0.05)、「なぜそのような介護をしているのか理解していると思う」(p<0.05)という項目について、有意な関連が認められた。

表4. 普段行っている介護について

	受講前	受講後	Wilcoxon t-test
自分の行っている介護は、利用者に適した介護だと思う	2.21±0.098	1.82±0.089	p<0.01
なぜそのような介護をしているのか理解していると思う	2.39±0.101	2.07±0.123	p<0.05
利用者に対して声かけをしていると思う	2.95±0.089	2.56±0.136	p<0.05
介護に必要な知識は持っていると思う	2.08±0.112	1.69±0.117	p<0.01
利用者の立場に立って考えて介護していると思う	2.26±0.114	1.97±0.113	p<0.05
利用者の自己決定を考えて介護していると思う	2.13±0.117	2.07±0.134	n.s
利用者のことを理解して介護していると思う	2.34±0.106	2.07±0.106	n.s

n=39

(3) 介護のイメージについて (表5)

「非常にそう思う」を4点から「全く思わない」を0点とし、点数化し受講前と受講後の間で比較を行った。

受講前では、「勉強になる」が3.53点(4点満点)で最も多く、「やりがいがある」が3.38点、「専門性がある」が3.23点の順であり、介護の3Kの1つと言われる「きたない」は0.92点と最下位であった。

受講前と受講後では、「専門性がある」(p<0.01)、「楽しい」(p<0.05)という項目について、有意な関連が認められた。

表5. 介護のイメージについて

	受講前	受講後	Wilcoxon t-test
きたない	0.92±0.153	0.71±0.151	n.s
きつい	2.17±0.179	2.23±0.170	n.s
給料が安い	2.92±0.161	2.87±0.180	n.s
楽しい	2.77±0.149	3.02±0.144	p<0.05
大変である	2.53±0.167	2.69±0.164	n.s
やりがいがある	3.38±0.113	3.30±0.111	n.s
勉強になる	3.53±0.096	3.58±0.102	n.s
専門性がある	3.23±0.118	3.71±0.089	p<0.01

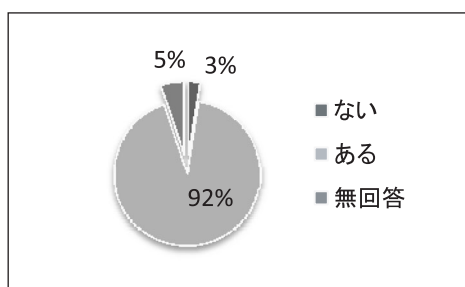
n=39

(4) 1, 2日目の介護技術講習会後の取り組み状況について(表6)

「1, 2日目の介護技術講習会後、現場に戻り実際取り組んだことはありますか」との問いに、「ある」と回答した人は36名(92%)であった。具体的な取り組みの内容は、「声かけやコミュニケーションの工夫」が21名、「移動」が14名、その他として「自立支援を意識した」、「排泄や入浴の着脱を再確認した」等であった。

表6. 講習会後の取り組み状況

ない	1
ある	36
無回答	2
合計	39



(5) 介護技術講習会を受講して受講生自身が一番変わったこと

「声かけの方法」「基本の大切さ」「利用者に適した介護を考えるようになった」等の回答が多かった。

(6) 講義・演習の理解について

「理解できた」と回答した人が、38名(97%)であった。「勉強になった」「今後もっともっと知識を増やしていきたい」「楽しかった」「勉強すればするほど奥が深いと思った」「普段の自分がどれだけ足りないのか考えさせられた」「基本の大切さを改めて痛感した」「自分流で実践していたので、利用者の気持ちなど考えさせられました」等の意見があった。

(7) 介護観について

受講前は、22名の記述であったが、受講後は31名の記述であった。記述内容としては、受講前は、「笑顔」「楽しく過ごす」「安心できる」等の表現が多かったが、受講後はその言葉プラス、「利用者の立場に立った」「専門的な知識を持って」「その人らしく」「利用者に応じた」という表現が多くなった。

6. 考察

(1) 介護技術講習会は、自分の介護を評価する場である

本研究の結果より、「介護に必要な知識は持っていると思う」「自分の行っている介護は、利用者に適した介護だと思う」「利用者に対して声かけをしていると思う」「利用者の立場に立って介護していると思う」「なぜそのような介護をしているのか理解していると思う」の項目について、介護技術講習会受講の前後において有意差が認められた。このことは、その項目の介護内容において、受講生は、「自分では今まで『行っている』と思っていた」が介護技術講習会を受講することによって『実際は行っていなかった』と気づいた」ということを示している。

今回の受講生のうち、31名がホームヘルパー2級を持っている。ヘルパー2級の取得カリキュラムは、学科58時間、実技42時間、実習30時間で構成され、合計130時間の講習・演習・実習を受講すれば、試験を受けることなく、講座を終了すれば必然的に、取得できる資格である。

介護現場での研修状況について、施設内・外とも1年間で全く研修を受講していない人は、24名(62%)であった。介護技術講習会の受講生は、介護職員として働いているものの、研修時間が少ないうえに、研修する機会があまりないという現状がある。自分が行っている介護がどうなのか、これでよいのか等を評価するためには、評価の基準となる指標が必要である。介護の場合は、研修等による学びから得るところが大きい。

32時間という短い時間で介護技術を十分に修得することは到底できるものではない。しかし、32時間という時間で、いままでの自分が行った介護を振り返り、今まで「行っていた、できていた」と思っていた介護が、介護技術講習会を受講したことにより、「していなかった、できていなかった」と気づくことができたのである。

この「気づき」には大きな意義がある。介護技術講習会は、知識や技術の修得のみならず、受講生自身が自分の行っている介護を評価する場であると考えられる。

(2) 学んだことを実践につなげる場である

1, 2日目の介護技術講習会後、次回の3, 4日目の講習会まで約2週間の間隔があるが、その間36人

(92%)の受講生が実際の現場で、介護技術講習会で学んだことを「取り組んでみた」と回答している。丸山によると、介護技術講習会の受講生655人を対象にしたアンケート調査で、「約20%の受講生が、講習会で学んだことを現場に戻ったら無理であると感じている」との報告がある。

本学の介護技術講習会は、工夫②で挙げたように「介護の基本を学ぶことである」ということを強調している。

介護技術講習会受講生は、介護の現場に入ったその日から、即戦力として期待され、方法論としての介護技術を展開していかなければならない。したがって体系的・理論的な教育がないまま、見よう見まねで試行錯誤的に介護を行なっている現状がある。ヘルパー2級の資格をもっている、講義・演習合わせて100時間の研修時間数では、基本を十分に理解することは困難である。

受講生には、多様な利用者の介護を考えると、一度基本に戻って、そこから、それぞれの利用者の状態に応じて個別性を捉え対応することを強調した。つまり、Aさんの介護を考えると、一度基本に戻り、そこから「でもAさんは『〇〇』の状況であるので、△△という介護を行う」というように考えることなのである。この〇〇がAさんの個別性であり、Aさんを尊重することでもあり、そして△△という介護を行う際の根拠となるのである。

演習時に一般化された手順（方法論）で指導すれば、現場に戻れば介護技術講習会で演習した事例と同じものはないので、受講生は、学んだことを現場で実践しないのである。介護技術講習会で学んだことが、介護の現場で実践されなければ意味がない。介護技術講習会では、受講生に対し「介護の基本を学ぶこと」を、何度も強調し説明を行い、手順（方法論）を教示するのではなく、声かけや行動の根拠を説明することが、受講生に受け入れられ介護現場での実践につながるものと思われる。今回、学んだことを現場で取り組んでみた受講生が92%いたことは、この介護技術講習会の工夫に効果があったものと考えられる。

(3)「専門職」としての意識づけができる場である

「専門性がある」「楽しい」という項目について、有意差が認められたことは、介護技術講習会を受講したことによって、さらにその認識が強くなったということを示している。

歴史的には、「介護」は、専門性を問わない素人でよいという考えではじまっている。「介護」という表現は

「常時の介護を必要とする」（「老人福祉法」昭和38年133号）というように「障害の程度を示す言葉」であったとされる。また、寮母の行う高齢者の世話が「介護」と命名され、看護に対する「介護」という言葉には素人が行うというニュアンスがあった。その後、急速な高齢社会の進行に伴い、介護業務の「専門性」が要求されるようになり、1987年「社会福祉士及び介護福祉士法」が制定された。

介護福祉士養成をする中で、「介護」の専門性を掲げる傍ら、雇用の悪化で仕事を解雇された人への再就職先として、国家規模で安易に「介護現場」への雇用促進に努めている現状があり、介護は素人でもできるものという偏見を広める結果になっている。介護の質の向上、専門性と言いながら、片方でだれでも就業できるものという認識には矛盾がある。

介護福祉士は「業務独占」ではなく「名称独占」であるため、介護現場では、介護福祉士の資格を必ずしも持っていなくても、介護職員として働くことは可能である。現在介護現場で、介護福祉士の資格をもっているのは、30.3%にすぎない。

高齢者や障がい者が尊厳をもって、地域の中でその人らしい安心できる生活を支援していくためには、サービスに携わる人材の質の向上を図っていくことが重要であり、サービスの中心的担い手である介護福祉士のさらなる質の向上が求められている。「介護の質の向上」を目指しているのであるならば、介護福祉士の取得方法を養成施設ルート一本にするのが本来のあり方である。しかし、介護人材の需要は、平成21年は137万人、平成23年は150万人、平成37年には233万人と年々高くなっているのに対して、離職率が17.0%と他の職種よりも高いという現状がある。また、介護は、3K（きつい、きたない、きけん）であり、給料が安いという風評があるため、就職希望者が減少して、介護の人材不足が慢性化している。平成20年度の介護福祉士資格取得者数約9.1万人のうち、養成施設ルートが約1.8万人で20%、実務経験ルートが約68万人で75%を占めている。介護福祉士の取得方法が養成施設ルート一本では、日本の介護を支えることができないのである。

介護現場での就業者が介護福祉士資格取得者となれば必然的に介護の質も向上するのであろうが、上記の現状を考えれば極めて困難であると言わざるを得ない。こうした状況においてはまずは、介護の現場で働きたいと思っている人が、介護の現場に入るまでの経過はどうであれ、「介護」の専門性を自覚し、更な

る学習をしていくことが重要であると考え、今回、将来介護福祉士になろうとしている人が、介護技術講習会を受講し、介護の楽しさを再確認し、より専門性を確認できたことは意義のあることであると思われる。

7. まとめ

平成17年度から、指導者と共に、本学独自の工夫を取り入れながら、「介護技術テキスト」に準じた介護技術講習会を実施している。

今回の研究は、介護技術講習会の受講生を対象にアンケート調査をもとに意識調査を行い、介護技術講習会の影響と効果を明らかにすることであった。

本研究で得られた結論は、本学で実施した介護技術講習会の影響・効果として、①自分がいままで行っていた介護を評価することができる、②基本の重要性を理解し、現場で実践できる内容である、③介護は専門性があることの意識づけをすることができる、の3点を挙げることができる、ということである。

介護技術講習会の受講生は、介護の現場で研修を受けることが少なく、日常の勤務をしながらその合間に受講している。指導する側から考えると、32時間という時間はあまりにも短すぎるが、受講生にとって32時間という時間が有意義な時間になるよう、指導者一同検討を重ね今後も実施していきたい。

参考文献

1. (財)介護労働安定センター：平成21年度 事業所における介護労働実態調査及び介護労働者の就労実態と就業意識調査. 2009.
2. 厚生労働省（社会・援護局福祉基盤課福祉人材確保対策室）：介護福祉士試験の在り方等介護福祉士の質の向上に関する検討会報告書. 2006.
3. 厚生労働省（社会・援護局福祉基盤課福祉人材確保対策室）：今後の介護人材養成の在り方に関する検討会 中間まとめ. 2010.
4. 丸山順子, 尾台安子：「介護技術講習会の意義と課題～受講生の意識調査より～」. 松本短期大学紀要, 105-117, 2006.
5. 厚生労働省・援護局長；社会福祉士及び介護福祉士法施行規則の一部を改正について（通知）；社援発第1019004号；2004.
6. 石橋真二他；「介護技術講習会指導者マニュアル」；社会福祉振興・試験センター；2004.
7. 栗栖照雄・松本由美子・渡邊一平, ほか：介護福祉教育の方法と実践. 角川書店, 東京. 2005.